

堀 辰雄 妻への手紙

堀 多恵子編



新潮文庫

ほりたつ お つま てがみ
堀辰雄 妻への手紙



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草4G

昭和四十年十月三十日 発行
昭和五十三年三月五日 十六刷

編者

堀^{ほり}多^た恵^え子^こ

発行者

佐藤 亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎

© Taeko Hori 1953

製本・加藤製本株式会社

Printed in Japan

新潮文庫

堀辰雄 妻への手紙

堀多恵子 編



新潮社 版

1707

目次

昭和十二年		七
昭和十三年		二五
昭和十四年		三五
昭和十五年		三九
昭和十六年		四九
昭和十七年		七三
昭和十八年		九

＊

辰雄の思ひ出……………一五

辰雄の手紙……………一七

晩年の辰雄……………三三

妻への手紙

昭和十二年

一

〔八月三十一日附 信濃追分油屋より〕

お手紙を有難う。この頃やつと一人きりになれて静かに暮らし出してゐます。よく森の中へいつて栗の木蔭などで山蟻を殺しながら本を読んだり手紙を書いたりしてゐるんだ。こんなことを一週間ばかり続けてゐるうちにやをら考へを仕事の方へ向けようといふのが僕の十八番、——しかし今度はいろんなことがさういふ僕の仕事の下準備を邪魔しさうですこし気がかりだな、戦争のことだとか夏中のおんまり楽しかつた思ひ出だとかが……

きのふの午後も、いまかうやつて君に手紙を書いてゐる草の中に寝ころびながら、アベラルとエロイズの手紙をよんだ。妻たらんよりは恋人たらんことを欲して（すでにアベラルの胤^{たね}を宿しながら）アベラルの求婚をも斥けたエロイズの気持など、それも一時ですぐ男の言ふなりになつてゆく気持も面白い。その後二人の恋が世間から攻撃的となり、別れ別れに修道院に

入つてから、数年後取りかはすやうになつた彼等の手紙にも、お互に相手を思ひ切らせて神にのみ仕へようとしながら、自ら相手を思ふのを禁じ得ずして悩みもだえる様など僕ら不信の徒の心をも打つものがある。——そんな殊勝なエロイズだとか、いつか君にも読ませた「ぽるとがる文」のはげしい氣持の作者だとか、さういつた僕の快心の女性にちかい女のひとを、古い日本の時代に架空して、そんな女性の残した日記みたいなのを、今度僕は発奮して書いてみたいんだ。三保ちやんの手紙に君が身体の弱いのに無理ばかりしてゐるといつて心配してゐたが本当に君こそ無理してはいけないぜ。追分へでもきて僕みたいにくらぶらしてゐられるといいんだに。俊彦君によろしくそのうちお便りするといつて下さい。

八月三十一日

辰 雄

二

〔九月二十三日附 信濃追分油屋より〕

何処からいい手紙でも来ないかなあと思つてゐたら君から来た。君が何処か田舎の方へいつてゐること、一週間許り前恩地さんから来た手紙で知つてゐたんだ。そんな田舎へいつてしばらく静かに一人で暮らすこと大いに賛成だと思つてゐたが、僕に一ことも知らせてくれないなんて怪しからんなと思つてゐたところだよ——しかしもう勘弁して上げる

あんなに言つたのに読んで呉れるかなと思つてゐたユウジェニ・ド・ゲランの日記、そちらへ持つていつて読んでゐる由、感心々々。しかしVol. Iを了つたのなら、ついでにVol. IIもとりにせて読んでくれたら、もつと感心だ。アミエルがその「弟思ひの聖テレジャ」について日記の中に書いてゐる箇所を、あとで少しばかり書き抜いてあげるから、難有く思ふがいい。

僕の仕事、なかなか捗取らない。当分持久戦の覚悟をしてゐる。書かうと思つてゐるのは、この前話したやうな古い日本の女の日記だけれど、最初の計画のやうに架空の日記を製造するのはどうも手に負へないので諦めて、丁度僕のさういふ企てにうつてつけの当時の日記が残つてゐるの、でそれに託して僕の空想を満足させることにした。日本の女の残した一番古い日記らしい日記である「蜻蛉日記」といふのがそれなんだ。浮薄な男に——男ごろろといふものはさういふもんだといつた世間のコンヴェンションナリズムに逆らつて——あくまでも真面目な愛を求めてやまなかつた一女性の日記だが、こんな日記がこんな風に残つてゐるのが本当に不思議なくらゐる清新なものを持つてゐる（ちよつとあの「ぼるとがる文」に共通なものさへあるくらゐだ）。僕にそんなことが出来るか出来ないか分からないけれど、まあさういつた古い日記の錆びをすつかりとつてびつくりするくらゐ若返らせてやりたいんだ。だけどこれまで一度もやつたことのない仕事なので、手をつける前に、いま、そのまほりを何度も首をかしげちや、ためつすがめつしてゐるところだ。——しかし、もう二三日したらとりかかれさうな氣もしてゐる。それに、いますこし僕は病氣な

んだ、二三日前からすこしね、しかしもう二三日したら癒れさうだね。それでこんな仕事のことばかり君に書いて、すこし自分に元気をつけてやらうと思つたわけさ。

アミエルの日記、君に書き抜いて上げようと思つて、枕許に開いてあるんだけど、なんだか面倒くさくなつたからこの次ぎにするぜ。でも、折角だからほんの最初の一節だけを書いてやらうか。

一八六四年九月十九日

二時間ばかり、美しい魂、ユウジェニ・ド・グラン、弟思ひの信心深いヒロインと共に過した。六年間のこの日記には、思想も感情も苦痛もこんなにある。何と人を夢みさせ、反省させ、生活させるものではないか。言はば一旦忘れた或メロデイのアクセントが何故か知らず胸をゆするやうに、それは私に郷愁的な印象を起させる。私は遠方の小径や少年時代の放心といふやうなものを再び見て、ぼんやりした声、自分の過去のこだまを聞いた。純潔、憂鬱、敬虔、昔の生活、つまり若い私の何百といふ思ひ出、覚めぎはの夢の逃げやすい影のやうな捉へられない姿が、驚いてゐる読者の眼前で輪舞を始めた。

そのうちこの日記を読んだ君の感想でも、しやちよこばらずに、書いてくれ給へ

三

〔十月二十五日附 信濃追分油屋より〕

お手紙とお菓子を難有う。僕は君とちがふのですぐかういふ風にお礼を出すから、覚えて置きなさい。恩地三保子嬢、おほぜい、お友達と一しよに二三日やつて来ました、僕のところにも遊びに来てくれるかと思つて大いに期待してゐたら、ちよつとお顔を見せにきたきりで（あれぢやまるで僕にちよつと拝ませたやうなものだ）又お友達と一しよに帰つてしまひました、大いにうらんでゐるとおことづけ下さい。僕目下大童になつて小説製造中です。トンボ日記はよかつたな。僕の奴も蜻蛉日記の焼直しみたいなものだが、こいつこそせいぜいうまくいつてそのトンボ日記といふところでせう。来月五、六日頃仕上がる予定、それを雑誌社に届けかたがた十日頃まで上京します。野村君も僕と同道します。一つ都合がついたら追分の会を何処かではませうか。君にお貸した本はもつとお手許に置いて御愛読なさい。人が読めといつて貸した本は少くとも一年位は返さない方が礼儀だ。それ位熱心に読んで貰はなくちや貸し甲斐がないからなあ。川端さんはこれから今度買った別荘に入つて十一月一杯軽井沢に頑張る由、クリスマス頃その別荘を僕と野村君とで一週間ばかり借りて冬を楽しむ相談をしてゐます。自炊が困るのだが君でも本当にもつと元気で御飯炊きにきてくれるといいんだがなあ。（十月二十五日）

四

〔消印十一月十日 向島より〕

きのふはどうも大勢でよくお話も出来ず残念でした。こんどの日曜（十四日）に御都合よろしければ恩地さんお誘ひ合ひの上、一しよに室生さんの所へおしかけませんか。よろしければ日曜の一時頃銀座の資生堂でお待ちしてゐます。十五日には僕は又追分へ行きます（そちらの御都合で土曜でもいい）小生の家の電話はスミダ七〇八七

五

〔十一月二十五日附 軽井沢つるやより〕

お見舞を難有う。君達の電報もあの夕方になつて漸つと手にしました。僕は元気ですから御安心下さい。いま勉強しかけてゐた本、これから大いに読まうと思つて買込んであつた本など何もかも失つてしまつたのは、いかにも不自由ですが、まあ、この冬うんと仕事をして、すぐ取返して見せます。あす川端さんが引き上げられるので、すぐその跡へ僕は引き移ります。野村君もたぶん来るでせう。東京へは当分帰らないことにしました。帰つて僕の部屋に一ぱいある僕の抜け殻みたいな、もう僕にはどうでもいいやうなものばかりの中で暮らすのが苦しいのです。そんなもの

こそ本当に焼けてしまつて呉れたらよかつたのに――

お言葉に甘えて君達にすこし御無心をします 日本橋の三越洋書部（ドイツ語の）にインゼル叢書^{ヘライ}といふのが少し置いてあります その中に確かりルケの“Marien Leben”（マリヤの生活）と“Sonette an Orpheus”^{ソネット、アン、オルファイス}（オルフェに捧ぐるソネット）とがまだ残つてゐる筈です 多恵子さんにはマリヤの方を、三保子さんにはオルフェの方を、それぞれどうかサインをして僕にデジケエトして呉れませんか さうしたら今度の天災のいい記念にいたします――若しその指定の本がなかつたら何か他の同じ叢書中のリルケのものでも構ひません
十二月になつたら一遍上京します そのときは又お会ひできるだらうと思つて楽しみにしてゐます

この夏やはり追分に来てゐた友達の一人から「この夏の美しかつたものがすべて失くなつたことは、そのために美しかつたやうで悲しい気もちです」などと言つてよこしました 本当にそんな気もする位

けさもちよつと追分へ行つて来ました 油屋の人達、みんな割合に元気です 来年までには何とかバラックでもいいから建てて是非みんなに来て貰ふなどと言つてゐました しばらく焼跡に立つて僕は寒い風に吹かれて居りました「かげろふの日記」の下書きの焼け残りなんぞがまだひらひらと飛んでゐました

二十五日

辰 雄

多恵子様

三保子様

六

〔十二月一日(夕)附 軽井沢一三〇七より〕

リルケの「マリヤ一代記」「詩抄卷」「若き婦人への手紙」その他いろいろな物を難有う けふ受取りました

僕は先月二十六日川端さんの引き上げたあとへすぐ一人で引き移つた 此処は Happy Valley といふ名前の小さな谷——なんていふと洒落れてゐるけれど、そんな谷がどこにあるのやら?——に面した、山の上の小さなコツテエジ、——周囲の木々がすつかりいまは丸坊主なので、その枝を透いて、すぐ真正面にもう真白になつた八ヶ岳が見え、夜なんぞはずつと下の方に汽車が通るのまでが小さく見えるやうな場所です

野村君が来るまで、僕はこんな山の中に一人で二晩泊つたんですからね なかなかうぎでせう 毎日野村君と一しよに薪拾ひをしたり、山の下の井戸まで水を汲みにいつたりして、よく働いてゐます しかしまだこんな原始的な生活には馴れないので、そつちの方にばかり氣をとら

れ、それにすぐ草臥れてしまつて、なかなか肝腎の仕事には手がつけられさうありません。それに暖炉にぼうぼうと威勢のいい音を立てて燃えてゐる火を見守つてゐると、知らない間にずんずん時間がたつてしまふ、もつとも時計なんぞわが家には無いので、どの位時間が立つたんだか分からないけれども――

一度君達にもかういふ生活を味はせてやりたいものだな。病氣なんぞだつてすぐ忘れてしまひますよ。

しかしけさは本当をいふとちよつと辛かつた。温かさうな日がちらつと差したかと思ふと、すぐ真暗な雲に遮ぎられてしまつて、そしていまにも雪がふつてきさうで（いつそ雪がふるなら思ひ切つてどつさり降つてくれればいいのに）――そこへ、君達からの贈物が届いたので、急に家の中まで明るくなつた。僕が愉しさうに荷をほどいてゐるのを、傍で野村君がうらやましさうな顔をして見てゐるので、思ひ切つて Staedtler の鉛筆を一本やりました。それから早速有平糖を一しよに頬張りました。

本はみんな独乙語なので、野村君に見せてやつてもしやうがないので、それから本だけかかへて僕は二階の私室に閉ぢ籠つて、それを傍に置きながら、いま、この手紙を書いてゐるところです。これまでは本といったら、藤屋のおぢいさんの持物らしい聖書をつぱらつてきたのが傍にあるつきりでした、こんなときでなければこんな物は読めさうもないと思つて、ルカ伝なんぞを